地域医療に求められていることとは

実習施設：さいたま市民医療センター

はじめに

埼玉県さいたま市には現在、2025年問題が重くのしかかっている。日本で最も急速に進行する超高齢化に直面している埼玉県がどう立ち向かっているのか、その現状を見せていただきながら、病院内の見学を通してどのような職種の方々が連携して地域を守っているのかを三日間の実習で学ばせていただいた。

方法

さいたま市民医療センターの「市民の健康と生命を守るため、地域医療の中心的な役割を果たし、安全で良質、かつ高い倫理観を備えたチーム医療の提供に努める」という基本理念の下、病院を見学させていただいた。

実習内容としては、朝に内科カンファレンスに参加させていただいた。そして病院で医療を行う上で必要不可欠な様々な職種の方々の職場をひとつひとつ丁寧に説明していただいた。

結果

内科初診外来では、石田副院長の診察を見学させていただいた。Hospitalist(病院総合医)としての働き方を見ることができた。

病院内の見学では、リハビリテーション科、検査科、地域連携室、MSW、医事課、栄養部、感染管理室、医療安全室、MACT、生理機能検査、内視鏡部、救急部、薬剤科、放射線科、エネルギーセンターの役割を知ることができた。

考察

超高齢社会、2025年問題、多職種連携のありかたが騒がれている今日、「地域医療とは、他職種連携とは」という話題は我々医学生においても耳にすることは少なくない。実際、教育においてそのような事柄に焦点を当てた講義にも力を入れている。しかし、大学の教室で受けるそのような授業に我々はどこか他人事のような思いを抱いてしまう。なぜか。そこには自らの目で見て、空気を肌で感じるリアリティーが無いのだ。そこでこの地域医療体験実習が行われた。結果として得られた経験と感動は今後かけがえのないものとなるだろう。

さいたま市民医療センターの患者の多くは高齢者で、地域における役割は地域のクリニックからの紹介状でほとんどの診察を行い、症状が落ち着いたらかかりつけ医のもとに帰すという形態をとっている。これは他の医療機関との役割分担を行い、医療連携によってそれぞれの病院が本来の能力を発揮することで患者に本当に必要な診断や医療を提供することを目的としている。その過程には医療事務をはじめ、ベッドコントロールの看護師などが関わる。来院し医師の診察のあと検査科や内視鏡科による検査を受ける。入院してからは看護部、栄養部などが関わり、退院時にはMSW(メディカルソーシャルワーカー)の担うところも大きい。このように医療の見えないところで本当に多くの職種の方々が協力している。

さいたま市民医療センターの数多くの部署を見学し、そこにいる方々とお話をさせていただく中で、部署ごとにそのスペシャリストがいる。知識や現場の情報などはやはり医師だけでは把握できないことを実感し、医師はそのスペシャリスト達の中心的存在となり、医療とその後の患者のフォローを共に行うことで患者の本当に必要とするものを見つけ、向き合っていけるのだと実感した。

感想

三日間の実習を通して気付いたことがある。それは病院とは疾患を治すだけの場ではなく、患者を診てしっかりとしたフォローを加える。そして医師だけで足りない部分をコメディカルと手を取り合って患者一人一人と向き合う。そのことを通して結果的に地域を守っていくことが今後の地域医療に求められていると気付かされた。

謝辞

先日はお忙しい中、様々な部署を見学させていただきありがとうございました。地域医療を実感できるだけではなく、他職種連携の姿を目の当たりにできて大変勉強になりました。

私たちのために本当に多くの方々に協力していただき、この場を借りて御礼申し上げます。

参考文献

1) さいたま市民医療センターホームページ.基本理念・基本方針
http://www.scmc.or.jp/about/basic-principle/
(2017年10月6日閲覧)

2) さいたま市民医療センター.診療科のご案内
http://www.scmc.or.jp/about/departments/
(2017年10月6日閲覧)

これからの地域医療のあり方

実習施設：さいたま市民医療センター

はじめに

超高齢化社会が進む今、医療の中で重要になってくるのは地域医療であると思う。今回、先進的な地域医療を行っているさいたま市民医療センターにて実習を行うことで地域医療のあり方、これからの地域医療がどのようになっていくかを学んだ。

方法

2017年10月3日(火)から10月5日(木)の3日間、さいたま市民医療センターにて実習を行った。地域医療における地域医療中核病院の役割、医師と他職種がどのように連携しているか、チーム医療の重要性を病院で働く様々なスタッフのお話を聞き、実習を行った。

結果

・　さいたま市民医療センターの特性

さいたま市民医療センターでは、毎朝内科カンファレンスが行われている。そこには院長、副院長をはじめ、多くの医師が参加している。特筆すべきは、循環器、消化器、血液など多くの科が一緒に集まっていることである。そうすることで、患者さんを総合的に診ることを可能にしている。

また、当病院はMACTという取り組みを行っている。MACTというのはモニターアラームコントロールチームの略で心電図モニターによる看護師のアラーム疲労を軽減するための革新的な取り組みをしている。心電図モニタ装着・中止基準やアラーム設定を見直すことでアラームの鳴る回数を減らし、鳴った時にすぐに対応できる。また、医師、看護師の心電図モニタに対する教育も盛んに行われている。

そして、当病院は、紹介率90%、逆紹介率が100%に近いことが分かった。これはクリニックや診療所との分業ができていることが分かる。

・　医師と他職種の連携

今回の実習では医師の業務だけでなく、医師・病院に関わるほぼ全ての職種の方の業務の内容を見学した。外来で出された検査のオーダーに基づき、生理機能検査、検査科(血液・細菌・病理)、放射線科などのあらゆる部署が対応し外来の医師に素早く情報を送っていた。

・　地域医療におけるさいたま市民医療センターの役割

地域連携室という部署で、MSW(メディカルソーシャルワーカー)さんの話を聞いた。この病院は入院後、患者さんが家に帰ることができるようになるまでを考えている。入院後、患者さんが生活を取り戻すためにどうすればいいかを経済的な面、ご家族の支援状況など色々な面から考えていた。

考察

さいたま市民医療センターは地域医療中核病院でありながら、先進的な取り組みをしている。朝のカンファレンス、MACT、紹介率90%、逆紹介率100%を誇る小病院との分業など他の病院ではあまり行われていないことを革新的に行っている。当病院がこれからの地域医療における病院のモデルとなるのではないかと思った。

超高齢化社会が進む今、社会保障費の増大が問題となっている。当病院のように分業を行うことで、無駄な検査の省略、長期入院の減少などが期待できる。これによって医療費は大きく削減されると思う。社会保障費の問題において、地域医療で考えるべきことは多い。

感想

今回この実習に行ってよかったことの一つとして、医師になるという自覚が芽生えたことであった。スタッフの方々は自分たちを学生というより、医師として接してくれた。その中で、チーム医療におけるあらゆる職種の方と関わる医師に求められることは多くあることが分かった。周りから頼られる医師になるために、これから多くの努力をしなければならない。

謝辞

今回、多くの職種の方々がお忙しい中、自分たちのために時間を割いて下さった。業務の最中にもかかわらず、親身に丁寧に説明して下さった。非常に有意義な3日間となりました。この場を借りて感謝申し上げます。また機会がありましたらよろしくお願い致します。

参考文献

1)　さいたま市民医療センターホームページ.院長ご挨拶. www.scmc.or.jp/about/message/
(2017年10月13日閲覧)

2)　さいたま市民医療センターホームページ.MACTのご紹介. www.scmc.or.jp/character/mact/
(2017年10月13日閲覧)